

# アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み —4度の来日（1925-1937）における日本音楽研究と 日本の作曲界への貢献

Henri Gil-Marchex's attempts at cultural exchange between Japan and France :  
contributions to Japanese music research and the composers' circle

---

白石朝子

SHIRAISHI Asako

Henri Gil-Marchex was a French pianist who concertized around Europe in the first half of Twentieth century. He visited Japan in 1925, 1931 (twice) and 1937, four times in total, giving concerts and lectures in various places throughout Japan.

In this paper, Henri Gil-Marchex's Japanese music research and his contributions to composers in Japan are discussed. While researching Japanese music, Henri Gil-Marchex made four visits to Japan, which developed his viewpoint on Japanese music, not only in terms of the progression of traditional Japanese culture but also the development of the overall Japanese music world in which Japanese people adapted to Western music. Furthermore, while recognizing the progress of Japanese composers, he pointed out that the Japanese placed a disproportionate emphasis on German music in musical education. With each visit, Gil-Marchex deepened his friendships with Japanese composers. He supported concerts organized by the Japan Society for Contemporary Music, and contributed articles introducing Japanese composers to French magazines.

キーワード：Henri Gil-Marchex, 西洋音楽受容 Reception of Western Music

日仏文化交流 French - Japanese cultural exchange, 国際文化振興会

日本音楽研究 Japan music studies, 須永克己 Katsumi Sunaga,

大澤壽人 Hisato Osawa, 外山道子 Michiko Toyama

## はじめに

アンリ・ジル＝マルシェックス (Henri Gil-Marchex 1894-1970) は、ディエメ (Louis Diémer 1843-1919) やコルトー (Alfred Denis Cortot 1877-1962) に師事し、パリ音楽院を首席で卒業後ヨーロッパを中心に活躍したフランス人ピアニストである。日本には、1925 (大正 14) 年、31 (昭和 6) 年、37 (昭和 12) 年に訪れている。

日本における西洋音楽受容史研究では、これまで、官主導の教育のもとドイツ音楽偏重であった日本の音楽界に対し、ジル＝マルシェックスが 1925 年にフランス音楽や近現代の作品を含んだプログラムを演奏して、衝撃を与えたことが言及されてきた<sup>1</sup>。また、彼の来日に力を注いだ薩摩治郎八 (1901-1976) の遺品の調査をもとに、薩摩とジル＝マルシェックスとの交流が紹介され、ジル＝マルシェックスが行った演奏会の詳細についても明らかにされつつある<sup>2</sup>。しかし、ジル＝マルシェックスがその後も来日を重ね、日本の音楽文化の発展を体感しながら演奏活動や講演活動を行い、さらに、日本音楽を研究したことに関しては、全く研究が行われてこなかった。

本論文は、昨年度までに行ったジル＝マルシェックスの日本滞在における音楽活動と日本音楽界への影響に関する研究<sup>3</sup>に続いて、ジル＝マルシェックスによる日本音楽研究について明らかにする。また、ジル＝マルシェックスと西洋人作曲家との交流や、日本人作曲家に関するジル＝マルシェックスの著述を示した上で、西洋人作曲家と親しかったジル＝マルシェックスが与えた日本人作曲家の音楽観への影響と、フランス音楽界への日本人作曲家の紹介について述べ、ジル＝マルシェックスによる日本の作曲界への貢献を考察する。

## 1. ジル＝マルシェックスによる日本音楽研究の成果

## (1) 記事や論文の執筆

ジル＝マルシェックスは、1927 年から 1939 年までの間に、日本音楽に関する 8 本の記事や論文を著した (表 1)。これらは当初、*Revue Pleyel* や *Revue Musicale* といったフランス発行の音楽雑誌に掲載されたが、ジル＝マルシェックスが 3 度の来日を経た 1935 年以降、日仏文化交流を目的として発行されていた *France-Japon*<sup>4</sup> や、『婦人ノ友』、*Contemporary Japan*<sup>5</sup> といった日本発行の雑誌に掲載されたことが注目される。また、1927 年に発表した論文は翻訳され、1929 年に *Musical Observer* にも掲載された<sup>6</sup>。

表1 ジル＝マルシェックスによる日本音楽についての記事・論文

発行年月	雑誌名	ページ	タイトル
1927.3	<i>Revue Pleyel</i>	244-248	A propos de la musique japonaise
1931.11	<i>Revue Musicale</i>	305-320	La musique au Japon
1935.2	<i>France-Japon</i>	56-58	La musique au Japon
1937.6	<i>Contemporary Japan</i>	264-276	Music in Japan
1937.7	婦人ノ友	89-91	日本婦人ト西洋音楽
1938.1	<i>France-Japon</i>	214-215	Quelque minutes avec le pianiste Gil-Marchex
		216-217	Les japonaises et la musique occidentale
1939.1	<i>France-Japon</i>	29-32	La musique moderne japonaise

## (2) 作品の発表

ジル＝マルシェックスは、日本の文化から着想を得て《芸者の7つの歌 *Sept Chansons de Geishas*》と《古き日本の二つの映像 *Deux Images du Vieux Japon*》を作曲した。どちらも1935年に楽譜が出版されている。前者は、1926年出版の詩集『*Chansons de Geishas*』<sup>7</sup>から選んだ詩をもとに作られた歌曲である。後者は〈吉原帰り *Retour du Yoshiwara*〉と〈出雲の秋月 *Lune d'Automne à Idzoumo*〉の二曲から成るピアノ曲である。ジル＝マルシェックスは、このピアノ作品の作曲にあたって、日本音楽を模倣するのではなく、滞在時に聴いた旋律やリズムを取り入れ、日本で感銘を受けた数々の印象を描いたと楽譜に記している。1937年5月には、ジル＝マルシェックス自身の演奏で日本初演を行った。

## (3) 講演活動

ジル＝マルシェックスは、来日中、西洋音楽に関する数多くの講演を行ったが、他国で日本音楽についての講演も行った。今回の調査で明らかになったのは、1935年、フランス国立ギメ美術館において行われた『*La musique au Japon 日本音楽*』と題した講演と、1937年、フランス領インドシナやマレー諸島において行われた日本音楽に関する講演である。後者は、国際文化振興会の支援を受けて行われたものであり、この講演のために国際文化振興会から、邦楽のレコード10枚と幻燈25枚を借りたことが記録されている<sup>8</sup>。

## 2. 1925年の日本滞在における日本音楽研究

### (1) 日本音楽との出会い

1925年10月、ジル＝マルシェックスは初めて日本を訪れた。彼の来日は、「フランス音楽の精華を日本に紹介し且つ我が國固有の音楽を研究して彼の國に傳へるため」<sup>9</sup>であると当時の新聞が報じた通り、日本音楽研究の第一歩になった。ジル＝マルシェックスは、約3ヶ月の滞在中に東京、横浜、大阪、京都、神戸で演奏会を開いたが、その他にも日光や奈良を訪問したことを明らかにしている。そして、「将来作曲をしたいので、日本演劇や能を見たい」<sup>10</sup>という彼の望み通り、能や歌舞伎を鑑賞し、日本の伝統文化を体感した。また、日本滞在中、御前演奏を行ったジル＝マルシェックスは、「皇居においても音楽を聴く機会を得た」<sup>11</sup>と述べている。

### (2) 日本における音楽文化とその継承

日本文化に触れたジル＝マルシェックスは、西洋人に対してどのように日本音楽を伝えたのか。例えば、能は「超俗的な本質を有する叙情的な演目であり、詩、音楽、舞を組み合わせた動作や宗教的精神、面をかぶった役者と物語を解説する静かな合唱の存在によって、ギリシア悲劇とある類似性を示している」<sup>12</sup>と述べている。また、能は「日本人の伝統的な心の不滅の力を最もよく確認できる、日本初の演劇芸術」<sup>13</sup>であり、「音楽の役割は非常に重要である」<sup>14</sup>として、横笛、鼓を紹

介した。そして、歌舞伎については、菊五郎による「マシーン<sup>15</sup>を彷彿させるような角の無い名人技の優雅な」<sup>16</sup>舞と琴、三味線、尺八、琵琶などを紹介した。さらに皇居で聴いた皇室典礼の音楽は「中国、朝鮮から持ち込まれたこの音楽は大切に保存され敬虔な熱意でもって完全な形で守られている。」<sup>17</sup>と述べている。

ジル＝マルシェックスは、これらに加えて「茶摘みの唄、手まりで遊ぶ若い娘の唄、月の光の下の漁師の唄」などの日常生活における唄にも目を向け、「日本の生活の美へのたゆまぬ関心事は、ほぼ様式化することなしに、庶民の生活を変化させることができた。…実生活の全ての小さな出来事は、美しさの変わらぬ規則に秩序だてており、その美しい旋律は嘗てないものである。」<sup>18</sup>と述べている。また、ジル＝マルシェックスは、日本が西洋文化を受け入れながらも、日本の伝統文化を変わず継承しているという現状を目の当たりにして驚いた。この点について、彼は「我々の風習は外部からの刺激であって、日本の古い精神の変化は何もなく、傷つけられない。日本は、西洋の実利主義のエゴイズムで下品な闇の中で惑わされない。」<sup>19</sup>と述べている。演奏旅行で世界中を巡ってきたジル＝マルシェックスにとって、日本の文化は新鮮に感じられた。

### (3) 日本音楽の特徴と西洋音楽への有効性

ジル＝マルシェックスは、日本音楽の特徴について、「和声と対位法は考慮されず、旋律には果てしない種類があり、リズムは格別な豊かさを持ち、複雑さによって強い印象を与える。」<sup>20</sup>と述べている。そして、「現在ヨーロッパでは、版画や漆や磁器へ興味が強く持たれるが、音楽は軽蔑され、理解されない。しかし、それは意味をもつ。…それは、私たちの作曲家にとって大変に有効なものとなるだろう」<sup>21</sup>と提言した。ジル＝マルシェックスは、1925年の初来日で、実際に日本文化に触れながら、日本文化に対する興味を深め、日本音楽の特質であるリズムと旋律が西洋音楽に生かされることを期待するようになり、日本音楽研究に努めたといえる。

## 3. 1931-32年の日本滞在における日本音楽研究

### (1) 日本音楽研究の本格化

ジル＝マルシェックスは、初来日から6年後、1931年に再度来日した。今回彼はフランスの文化使節として、「佛蘭西近代音楽ノ紹介トラテン系楽人ノ音楽ニ對スル解釋ノ紹介」<sup>22</sup>を目的に日本を訪れたため、日佛會館や全国各地の大学におけるレクチャーコンサートを中心として演奏活動を行った。

彼は演奏活動の傍ら、11月には *Revue Musicale* に『日本の音楽 La Musique au Japon』と題した15ページの長い論文を載せている。ジル＝マルシェックスは、この論文においてポールクローデル (Paul Claudel 1868-1955) や原勝郎 (1872-1924) などの著書<sup>23</sup>より文章を引用して持論を展開していることから、日本文化について熱心に研究していた形跡がある。また、彼は今回、3月と10月に2度来日し、合計約5ヵ月間という長期滞在によって日本の四季の移ろいを体感した。この経

験によって、ジル＝マルシェックスは、日本人とフランス人に共通する、自然への美意識を論じることとなったといえる。

## (2) 日本の伝統文化と音楽教育の現状

ジル＝マルシェックスは、能、歌舞伎のほか文楽、浄瑠璃、舞楽についても紹介し、それらに使用される琴、三味線、鼓など楽器に関しても、それぞれの奏法や役割を詳しく紹介した。また、今回は、日本の音楽教育の現状に言明していることが注目される。例えば、南葵音楽図書館について、「徳川侯爵は、東京に、ヨーロッパの羨むような資本で音楽図書館を建てた。音楽雑誌が多く、その年の新しいものがあり、先進的な考えの全てがある。」<sup>24</sup>と紹介し、東京音楽学校について、「大変よく組織されており、ピアノ、弦楽器、声楽を教えているが、能、琴、三味線のクラスもある。残念ながら、和声、フーガ、対位法、管楽器のクラスはない。」<sup>25</sup>と述べている。ジル＝マルシェックスは、演奏会開催のために、東京音楽学校へ二度訪れている。

## (3) フランス音楽と日本人の美意識

ジル＝マルシェックスは、日本に長期滞在し、日本の四季折々の豊かな自然を知った。ジル＝マルシェックスと親しく交流した松平頼則(1907-2001)は、雑誌記事で、ジル＝マルシェックスが「日本とフランスは四季の変化があるので似ている。ドイツはあまり太陽が照らないので暗い。だから日本人はフランス的であるのは当然だ」<sup>26</sup>と述べたことを紹介しているが、ジル＝マルシェックスは、自身の論文のなかで以下のように述べている。

「日本人が自然と向かい合う美への姿勢は、クーラン、ラモーからラヴェル、イベールに至るまでフランス人の音楽に対する姿勢とまさに一致する。…慎みのある表現と精神的なものに対する敏感さのために、フランス音楽は、古い作品においても現代作品においても日本人に合っている。」<sup>27</sup>

この考えによって、ジル＝マルシェックスは「超人的な夢や恍惚とした物憂さ、荒々しい重々しさ」<sup>28</sup>のあるドイツ音楽や「全てにおける過剰さ」<sup>29</sup>のあるイタリア音楽に対して日本人にはフランス音楽が最も合っていると述べた。

## (4) 日本音楽の現状と西洋音楽に対する重要性

ジル＝マルシェックスは、今回も日本における伝統文化の継承について賞賛した。それは、以下の言葉で表わされている。

「日本の伝統音楽は、完全な形のままで維持されているが、日本人が私たちの音楽への貪欲な好奇心によって刺激されることを妨げることはない。…さらに、ヨーロッパやアメリカで非常に大きな位置を占める私たちの西洋音楽が日本人の生活の中でも同様に重要な役割をきちんと果たしている。…日本国民が驚異的な活力で吸収する力を持ったのは、受け継いできた本質と相いれないものを見分け、拒絶できたからである。…革新的なものや新しいものは、日本国民の生活に入る前に噛み砕かれる。日本人は新しい能力を得ながら何も放棄しない」<sup>30</sup>

また、ジル＝マルシェックスは「最近、室内音楽作品においてピアノと三味線、尺八を組み合わせようと試みた…そのような試みをするのは興味深い。」<sup>31</sup>と述べ、洋楽と邦楽の両方を取り入れて新しい音楽をつくらうとする日本人作曲家についても指摘している。技術的な点では、「西洋の音階を用いることで、日本音楽は自らを衰えさせ、西洋芸術の退化した副産品となり得る」<sup>32</sup>と危惧し

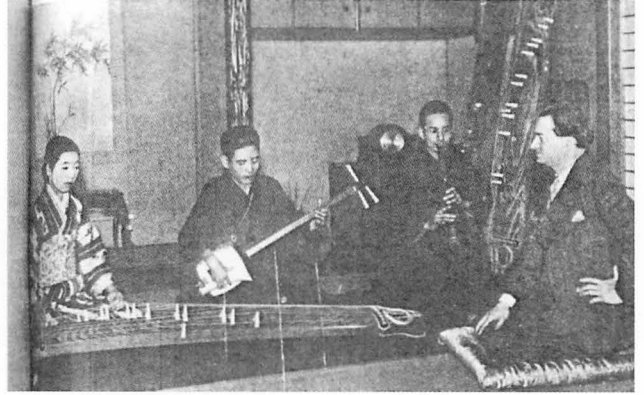


写真1 ジル＝マルシェックスと宮城道雄（中央）

たことが注目される。ジル＝マルシェックスはこの働きにおいて顕著な音楽家、宮城道雄(1894-1956)とも交流した(写真1)<sup>33</sup>。ジル＝マルシェックスは、宮城について、後に「彼は、音楽上の基本原則を実際に学ぶことなく彼自身の直観によって、日本音楽における様式で、和声とヨーロッパ特有の対位法を見事に取り入れて作曲した最初の人である。」<sup>34</sup>と述べている。

その一方で、西洋の音楽家に対して、日本音楽の重要性について以下のように論じた。

「日本の伝統と手法はこんなにも奇跡的に変わることなく残っており…この伝統と手法は私たちの音楽的芸術にとって革新の機会となるだろう。…白人は、ラテンやアングロサクソンを優位とする考え方で物事を捉えることにあまりに慣れすぎているため、西洋文化に従属していない音楽が民族芸能以上の重要性があることを認めがたい。それは誤りである。…この安易な軽蔑は無知の証である。私たちは確実に多くの学ぶべきことがある。…極東の音楽を真剣に研究するべきである。日本人は私たちの西洋音楽を研究しているではないか」<sup>35</sup>

この言葉は、西洋の音楽家達への投げかけと同時に、ジル＝マルシェックスが《芸者の7つの歌 *Sept Chansons de Geishas*》や《古き日本の二つの映像 *Deux Images du Vieux Japon*》を作曲する動機づけを示しているといえる。

#### 4. 1937年の日本滞在における日本音楽研究

##### (1) 国際文化振興会の支援

ジル＝マルシェックスは、1937年に4度目の来日をした。今回も1931年の来日と同様にフランス政府の文化使節として日本を訪れたが、これまでと大きく違う点は、日本の国際文化振興会からも招聘され、日本音楽研究を行なったことである。

国際文化振興会は、1934年に設立された機関であり、ジル＝マルシェックスは、「外国人の東方文化研究に対する便宜供與」の項目で選ばれた。国際文化振興会月報には、ジル＝マルシェックスに対して1年間「月式百円の補助」を与えたことが記されている<sup>36</sup>。この支援に関して、ジル＝マルシェックス自身が「今回は、国際文化振興会より厚い補助を頂き、長く滞在することが出来た」<sup>37</sup>

と述べており、結果的に8ヶ月間日本に滞在することができた。そして、これまでに増して多くの論文を書き、7月上旬から8月にかけては東洋音楽の研究と日本音楽に関する講演を含む演奏会の開催のために、フランス領インドシナやマレー諸島に出かけた。

国際文化振興会からの支援は、ジル＝マルシェックスの日本音楽研究が、日本による他国への宣揚として期待されるようになったということを示している。

### (2) 東京音楽学校の教育体制への批判と日本の音楽界の進歩

ジル＝マルシェックスは、以前にも論文の中で東京音楽学校のクラス編成について述べたが、今回は、以下のように教育体制について言及し、批判的な態度を明確に示した。

「日本政府が西洋音楽の教育を目的として東京音楽学校をつくってから…ドイツの影響は大変強い。特にピアノ教育において…ドイツの指導者優勢のもとに繁栄し、主な日本人教授はベルリンで音楽を学んだ。…上野の学校は現代音楽に興味を持つ若い作曲家の憧れに反抗的である。ここではバッハから勉強を始めブラームスで中断し、最先端の音楽を取り入れない」<sup>38</sup> その一方で、ジル＝マルシェックスは、日本の作曲界の動向に対して、以下のように述べている。

「長い間、日本の音楽はドイツ音楽の足跡を追っていたが、私の一回目の滞在から日本は大きな進歩を遂げた。作曲家の傾向について述べると、日本はドイツ音楽の影響が支配的であったが、現在は、フランス、ロシア、スペインの作品が最先端であり、この影響はとりわけ良いもので、日本の音楽を良い方向へ向かわせた。」<sup>39</sup>

この発言の背景には、日本人作曲家との交流が関わっているため、後述する。また、1934年から1937年にかけて幾度か来日し、楽譜の出版や作品の演奏という形で世界に日本の作曲家を知らせたチェレプニン (Alexander Tcherepnin 1899-1977) に関しても、以下のように評価した。

「チェレプニンは、日本に新しい和声の法則を作り出しているところである。西洋のリズムの厳格さに支配されずに、これら若き作曲家たちはより東洋風に作曲している。彼は、その意味で多大なことを為した。」<sup>40</sup>

### (3) 日本の作曲界への提案

このように、日本の作曲界がドイツ以外の国に対しても目を向け始めた事に対し、ジル＝マルシェックスは、西洋にとどまらず、東洋の音楽にも目を向けることを以下のように助言した。

「これまで日本人は伝統的音楽を保つ一方で西洋音楽に上手く適応してきた。…その技術はすぐに模倣の域を超えるだろう。日本がブラームスの、もしくはドビュッシーの垂流になってはいけない。若き日本人音楽家はフランスに西洋音楽の技術を学びにきているが、残念ながらアジア音楽を無視している。彼らは”日本の”音楽技術だけでなく”アジアの”、つまり中国やオランダ領インドの技術を学ばなくてはならない。」<sup>41</sup>

## 5. 1920-30年代の西洋における日本音楽研究と須永克己への影響

### (1) 1920年 - 30年代の西洋の雑誌に載せられた日本音楽研究

ジル＝マルシェックスが日本音楽研究を行った1920年 - 30年代において、西洋ではどのような日本音楽研究がなされていたのだろうか。アジア音楽の研究論文について調査したWaterson(1950: 265-279)には、西洋の雑誌に記された日本音楽研究として308の論文が紹介されているが、そのうち1920-30年代には、114本が記されている。

代表的な日本人の執筆者としては、田邊尚雄(1883-1984)、須永克己(1900-1935)が挙げられる。また、西洋人の執筆者としては、日本に滞在して研究を行い、論文を多く記した、ピゴット(Piggott, Francis Taylor 1852-1925)<sup>42</sup>、ペリ(Peri, Noël 1865-1922)<sup>43</sup>、カンゾネリ(Canzoneri, Vincent ? -1978)が挙げられる。カンゾネリは、ジル＝マルシェックスと同じように、国際文化振興会から援助を受け研究を行った<sup>44</sup>。

### (2) 須永克己の日本音楽観への影響

須永克己は、「ジル＝マルシェックスの来朝が我國に於けるフランス音楽隆盛の一つの動機となったことは確かである」<sup>45</sup>と述べたほか、1931年にジル＝マルシェックスの講演を聞き、自身の日本音楽観への影響を明らかにしている<sup>33</sup>。

須永は、生活に根ざした文化として捉えることによってはじめて真の価値を見出される日本音楽は、純粹形式の芸術とみなされるような大規模な形式を持つ西洋音楽とは、全く異なる方向に発達した音楽であり、日本音楽を支える日本国民が向上的な精神力を有することで、西洋音楽に対する唯一のアンチテーゼとみなされるのであると述べた。そして、ジル＝マルシェックスも用いた『世界音楽』という言葉を使って以下のように述べている。

「世界音楽の観念を一つの理想として解釋する時、ヨーロッパ音楽即世界音楽と考へて居た欧米人の迷妄を打破して、之と性質を異にはするが、同様に高い襲達の程度を持つてみる他の系統の音楽、例へば東洋音楽、就中、日本音楽の特徴を宣揚することが、眞の意味の世界音楽に到る道であることが判明する」<sup>47</sup>

この考え方は、ジル＝マルシェックスが講演で述べたこと、また、論文に記した内容と一致する。

## 6. 作曲家との交流と日仏音楽協会の設立

### (1) ジル＝マルシェックスと親交のある西洋人の作曲家

ジル＝マルシェックスと親交のある西洋人作曲家として、第一に、ラヴェル(Joseph-Maurice Ravel 1875-1937)が挙



写真2 ジル＝マルシェックス(右)とラヴェル



げられる。ラヴェルは、1924年、《ツイガーマヌ *Tzigane*》の初演を依頼したように、ジル＝マルシェックスをピアニストとして評価していた。また、1925年、ジル＝マルシェックスがラヴェルの《子供と魔法 *L'enfant et les sortilèges*》を編曲した《Five o'clock fox trot fantaisie extrait de L'enfant et les sortilèges》を日本で世界初演したことに對して大変喜んだ<sup>48</sup>という。そして、ジル＝マルシェックスは、ラヴェルのピアノ作品の技巧に関する論文<sup>49</sup>も書いており、ジル＝マルシェックスの演奏レパートリーには、数多くのラヴェルのピアノ作品が含まれている。ジル＝マルシェックスは、ラヴェルのピアノ作品の日本初演を多く行い、プログラムには二人の写真が掲載された(写真2)。

次に、ルーセル(Albert Roussel 1869-1937)の名前が挙げられる。ルーセルは、1934年《前奏曲とフーガ *Prélude et Fugue Op.46*》を完成させ、1935年、作品を献呈されたジル＝マルシェックスが初演を行った。また、ジル＝マルシェックスはルーセルのピアノ技巧に関する論文を書いている<sup>50</sup>。

その他にも、ジル＝マルシェックスに対して作品を献呈した作曲家として、オーリック(Georges Auric 1899-1983)、フェルー(Pierre-Octave Ferroud 1900-1936)、シュルホフ(Erwin Schulhoff 1894-1942)、ロザンタール(Manuel Rosenthal 1904-2003)が挙げられる(表2)。

表2 ジル＝マルシェックスに献呈された作品

作曲家	作品名	出版社	出版年	作曲年
Pierre-Octave Ferroud	bourgeoise de qualité "Types"	Paris: Rouart, Lerolle et Cie	1924	
Manuel Rosenthal	Six Caprices	Paris: HEUGEL Editeur	1927	1926
Erwin Schulhoff	Piano Sonata No.3			1927
	Suite Dansante en Jazz Op.74	Paris: La Sirène Musicale	1931	1931
Albert Roussel	Prélude et Fugue op.46	Paris: Durand & Cie.	1934	1933

## (2) 日本人作曲家との交流

西洋の作曲家たちと親しかったジル＝マルシェックスは、日本においても作曲家と積極的に交流した。例えば、1937年6月4日には、丸ノ内保険協会で開かれた日本現代作曲家連盟の第3回作品発表会に助演しており、江文也《三舞曲》、清瀬保二《琉球舞踊三曲》、池内友次郎《フーガ小品 [マ]》を演奏している。また、初来日時にジル＝マルシェックスの演奏に感銘を受けた松平頼則には、その後の日本滞在時にレッスンを行った。そして、松平が述べているように、ジル＝マルシェックスは松平の音楽活動に影響を与えた<sup>51</sup>。

一方で、ジル＝マルシェックスは、来日時以外にも日本人作曲家の活躍に貢献した。

大澤壽人(1907-1953)は、1930年に渡米してボストン大学音楽学部とニューイングランド音楽院で学んだ後、1934年にパリにわたり、ポール・デュカ(Paul Dukas 1865-1935)とナディア・ブーランジェ(Nadia Boulanger 1887-1979)に師事した作曲家であり、ジル＝マルシェックスは、大澤の作品を、日仏において初演した。まず、1935年11月8日にパリの Maison Gaveau において大澤壽人の作品の演奏会が開かれ、ジル＝マルシェックスは、《ピアノ協奏曲第2番 *Deuxième Concerto pour piano et orchestre*》のソリストを務めた。そして、1937年7月3日にジル＝マルシェックスは、海員会館でひらいた自身のリサイタルにおいて《丁丑春三題 *Trios morceaux de printemps "Teichu"*》の世界初演を行った。また、1937年4月7日に日比谷公会堂で開かれた、神戸女学院同

窓会主催「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」において、ジル＝マルシェックスは友情出演し、プログラムにないドビュッシーの作品を演奏した<sup>52</sup>。

また、外山道子（1913-2006）は、パリでピアノをジル＝マルシェックスに師事し、作曲をナディア・ブーランジェに学んだピアニスト、作曲家である。1937年には国際現代音楽祭において外山の《やまとの声 *Voix du vieux Japon*》が入賞した<sup>53</sup>。これは、国際コンクールにおける日本人で初めての入賞であった。

大澤と外山は、晩年に日本の大学で教鞭をとり<sup>54</sup>、日本の音楽界の発展に貢献したことから、ジル＝マルシェックスは、意義のある活動をしたといえることができる。

そして、ジル＝マルシェックスは、1937年以降、日本人作曲家についてフランスの雑誌に寄稿し、大澤壽人、松平頼則に加え、清瀬保二（1900-1981）、江文也（1910-1983）、池内友次郎（1906-1991）、荻原利次（1910-1992）、伊福部昭（1914-2006）を紹介した。

### (3) 日仏音楽同好会の設立

『Société Franco-Japonaise des Amis de la Musique（日仏音楽同好会）』は1938年2月に設立された。ジル＝マルシェックスは、「日本人の若い作曲家たちの努力に対して大きな助けとなる」<sup>55</sup>という考えから、「設立ヲ提案シ其基礎ヲ興ヘ」<sup>56</sup>、副会長の役職に就いている。会長は徳川頼貞であり、実行委員は池内友次郎などであった。1938年2月25日には華族會館において「日仏交換音楽会」が開催された。演奏曲は、松平頼則《フルートとピアノソナチネ *Sonatine pour flûte et Piano*》、池内友次郎《古い日本の旋律に基づくチェロのための幻想曲 *Fantasie pour violoncello sur violoncelle sur un air japonais ancien*》、清瀬保二《ピアノのための小組曲 *Petite suite pour piano*》、J.-B. Loeillet《*Sonate No.13 en sol majeur pour piano, violon et violoncelle*》、R.Laparra《*Suite*》、Ravel《*Passacaille*》、G.Fauré《*Cantique*》》であった<sup>57</sup>。

## 7. まとめ

これまで、ジル＝マルシェックスの日本音楽研究と作曲家との交流について詳しく述べた。ジル＝マルシェックスの日本音楽研究の視点は、4度の来日を経て、日本の伝統文化とその継承だけでなく、日本人が西洋音楽へ適応していく日本音楽界全体の発展へと広がり、日本の音楽教育におけるドイツ音楽偏重への批判や日本作曲界の進歩を述べるようになった。彼の研究は、国際文化振興会からの支援を受けており、日本からも注目されていたと言える。さらに、彼の研究は、須永克己の日本音楽観にも影響を与えたことが明らかになった。

また、西洋人の作曲家と親しかったジル＝マルシェックスは、来日ごとに日本人作曲家と親交を深めた。そして、日本現代作曲家連盟の演奏会に助演し、日本人作曲家についての紹介記事をフランスの雑誌に寄稿した。また、日本だけでなく、パリにおいても大澤や外山の活躍の一翼を担ったほか、日仏音楽同好会の設立に携わっている。これらの事実から、ジル＝マルシェックスは日本の

作曲界の発展に貢献したといえる。本論では述べることのできなかつた、1920-30年代の西洋における日本音楽研究の内容の検討と、他の西洋人作曲家による、日本音楽を模した、或いは、日本音楽に影響を受けた作品の調査と分析を通じた、ジル＝マルシェックスの活動の考察は、今後の課題とする。

本研究にあたり、井上さつき先生、沼辺信一氏、神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」より資料をご提供頂いた。

また、財団法人日東学術振興財団より研究助成を頂いた。

心から感謝する次第である。

---

## 主要参考文献

- Aaron I cohen 1987 "Michiko Toyama", International Encyclopedia of Women Composers : 703
- Honegger, Marc 1970. "Gil-Marchex, Henri", Dictionnaire de la musique. 1, Les hommes et leurs œuvres. A-K : 407.
- Waterson A. Richard, William Lichtenwager, Virginia Hitchcock Herman, Horace I. Poleman and Cecil Hobbs 1950. "Bibliography of Asiatic Musics, Tenth Installment" Notes, Second Series, Vol.7, No.2 : 265-279.
- 秋山邦晴、松平頼則 1992 「証言・日本の作曲家とフランス」『ポリフォーン』第10巻:138-144
- 生島美紀子 2009 「帰国後：名ピアニスト ジル＝マルシェックスとの親交」大澤資料プロジェクト『大澤壽人スペクタクル I ホームソングからピアノ協奏曲まで』: 15。
- . 2012 「プログラムノート II部:1920・30年代パリ楽壇の輝きと日本の交流、そして戦中」大澤資料プロジェクト『大澤壽人スペクタクルIII 1930年代ボストン・パリの輝きから戦後のシャンソンまで』: 13-16.
- 笠羽映子 1988 「日本とラヴェル——日本と西洋音楽をめぐる一考察」早稲田大学比較文学研究所『比較文学年誌』第24号: 142-165。
- 神吉恵美 1998 「ジル＝マルシェックスのピアノ演奏会」共同通信社『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』: 170-175。
- 神月朋子 2009 「近代日本の芸術音楽とフランス音楽の関わりについての試論：1920年代の『音楽新潮』フランス音楽特集号を対象に」埼玉大学教育学部『埼玉大学紀要』Vol.58 No.2: 249-260。
- 小林茂 2005 「1925年の器乐的幻覚 -- アンリ・ジル＝マルシェックスの演奏旅行と梶井基次郎」早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』第41号: 1-26。
- . 2008 「アンリ・ジルマルシェックスの演奏会詳細追補」早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』第44号: 145-148。
- . 2010 『薩摩治郎八—パリ日本館こそわがいのち』京都: ミネルヴァ書房。
- 佐野仁美 2010 『ドビュッシーに魅せられた日本人 フランス印象派音楽と近代日本』京都: 昭和堂。
- 芝崎厚士 1999 『近代日本と国際文化交流—国際文化振興会の創設と展開』東京: 有信堂高文社。
- 白石朝子 2011 「アンリ・ジル＝マルシェックスの日本における音楽活動と音楽界への影響—1925年の日本滞在をもとに」『愛知県立芸術大学紀要』第40号: 240 - 260。
- . 2011 「アンリ・ジル＝マルシェックスの日本における音楽活動と音楽界への影響—1931 - 32年の日本滞在をもとに」愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース『ミクストミュージズ』第6号: 56 - 72。
- . 2012 「アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み—1937年の日本における音楽活動をもとに」『愛知県立芸術大学紀要』第41号: 135-147。

- 染谷周子、杉岡わか子、三宅巖 1999 『ド・マルシェ-新興作曲家連盟 戦前の作曲家たち 1930-1940』東京：国立音楽大学附属図書館。
- 戸ノ下達也、長木誠司 2008 『総力戦と音楽文化—音と声の戦争』東京：青弓社。
- 中島健蔵、清水脩、増澤健美 他 1956 「日本作曲界の歩み」『音楽芸術』14 巻 8 号：52-62  
日佛會館発行 1934 『第八回財団法人日佛會館報告書』東京：日佛會館。
- 日佛會館発行 1938 『第十四回財団法人日佛會館報告書』東京：日佛會館。
- 平田公子 1999 「須永克己の日本音楽観」『福島大学教育学部論集 人文科学部門』福島大学教育学部，第 67 号：19-28。
- 船山隆 1975 「ラヴェルと私たちの時代——その『現代性』と『新しさ』と」音楽の友社『音楽芸術』第 33 巻第 6 号：18-29。
- 細川周平、片山杜秀『日本の作曲家 近現代音楽人名事典』東京：日外アソシエーツ。
- 堀成之 1984 「日本ピアノ文化史-14- ジル＝マルシェックスの来日（フランス・ピアノズムの紹介）」日本音楽舞踊会議『音楽の世界』第 23 巻第 11 号：12-19。
- 松平頼則 1931 「ジル・マルシェックスを訪ふ」『音楽新潮』5 月号：13-15
- 村上紀史郎 2009 『バロン・サツマと呼ばれた男—薩摩治郎八とその時代』東京：藤原書店。
- 2012 『音楽の殿様 徳川頼貞』東京：藤原書店。
- 柳澤健 1934 「国際文化事業とは何ぞや」外交時報社『外交時報』第 70 巻第 1 号：71 - 92。

---

<sup>1</sup> 堀（1988）、佐野（2010）など。

<sup>2</sup> 神吉（1998）、小林（1997、2010）など。

<sup>3</sup> 白石（2011、2012）

<sup>4</sup> Gil-Marchex "La Musique au Japon" France-Japon No.5(1935) p.56

<sup>5</sup> 日本外事協會発行

<sup>6</sup> Alice Mattulath "Musical vital to japanese life." Musical Observer No.7(1929)

<sup>7</sup> steinilber-oberlin et Hidetaké -Iwamura 『Chansons de geishas traduites pour la première fois du japonais』

<sup>8</sup> 財団法人国際文化振興会月報 1937 年 7 月号

<sup>9</sup> 讀賣新聞 1925 年 3 月 9 日付

<sup>10</sup> 同上

<sup>11</sup> Gil -Marchex "A propos de la musique Japonaise" Revue Pleyel No.44 (1927)

<sup>12</sup> 同上

<sup>13</sup> 同上

<sup>14</sup> 同上

<sup>15</sup> おそらく Léonide Massine (1896-1979) のことと推測される。

<sup>16</sup> Gil -Marchex "A propos de la musique Japonaise" Revue Pleyel No.44 (1927)

<sup>17</sup> 同上

<sup>18</sup> 同上

<sup>19</sup> 同上

<sup>20</sup> 同上

<sup>21</sup> 同上

<sup>22</sup> 『財団法人日佛會館第八回報告書』1932 年 3 月、8 頁

<sup>23</sup> ジル＝マルシェックスが引用した文献は以下の通り。Paul Claudel "l'Oiseau noir dans le soleil levant" (1927)、Charles Villard "D'un voyage au Japon" (1927)、Hara Katsuro "Histoire du Japon des origines à nos jours" (1926)、Émile Hovelague "Les peuples d'Extrême-Orient : Le Japon" (1921)

<sup>24</sup> Gil-Marchex "La Musique Moderne Japonaise" France-Japon No.25(1939) p.30

- <sup>25</sup> Gil-Marchex“La Musique au Japon” La Revue Musical No.120 (1931)
- <sup>26</sup> 松平頼則「証言・日本の作曲家とフランス」『ポリフォーン』第10号、p.139、1992年。
- <sup>27</sup> L'art français en extrême-orient, Un ambassadeur de la musique à Tokio ” Intransigeant, 24.11.1931
- <sup>28</sup> Gil-Marchex“La Musique au Japon” La Revue Musical No.120 (1931)
- <sup>29</sup> 同上
- <sup>30</sup> 同上
- <sup>31</sup> 同上
- <sup>32</sup> 同上
- <sup>33</sup> 「特選グラフセクション」『音楽世界』第4巻第2号、1932年2月。
- <sup>34</sup> Gil-Marchex“La Musique Moderne Japonaise”France-Japon No.25(1939) p.30
- <sup>35</sup> Gil-Marchex“La Musique au Japon” La Revue Musical No.120 (1931)
- <sup>36</sup> 「国際文化振興會記録 第四十五回理事會議事要録」昭和12年4月27日。
- <sup>37</sup> Gil-Marchex“Quelque minutes avec le Pianiste Gil-Marchex”France-Japon No.25(1938) p.215
- <sup>38</sup> Gil-Marchex“La Musique Moderne Japonaise”France-Japon No.25(1939) p.30
- <sup>39</sup> Gil-Marchex“Quelque minutes avec le Pianiste Gil-Marchex”France-Japon No.25(1938) p.215
- <sup>40</sup> 同上
- <sup>41</sup> Gil-Marchex“Quelque minutes avec le Pianiste Gil-Marchex”France-Japon No.25(1938) p.216
- <sup>42</sup> 1888(明治21)年両親と初来日。その後、駐日イギリス大使館付武官としてたびたび来日。“The music and musical instruments of Japan”London:B.T.Batsford.1893は、1967年『日本の音楽と楽器』服部瀧太郎訳で出版されている。
- <sup>43</sup> 1889(明治22)年にパリ外国宣教会宣教師として来日。布教のかたわら東京音楽学校で和声学、作曲法をおしえる。のち宣教会をはなれ、能など日本文化の研究に専念した。
- <sup>44</sup> 「目下本邦に滞在日本音楽を研究中なるが、その努力及成績見るべきものあり。最近研究費に窮しつつあるにより、七月より向こふ一年間月百五十円の奨学金を授与」国際文化振興會月報 1937年3月号
- <sup>45</sup> 須永克己『明日への音楽』名曲堂、1936年
- <sup>46</sup> 「あなたが私の国に来てから、日本人にとってその時までほとんど未知の世界である、フランス音楽の美しさを与え、最新の、洗練された音に没頭しました。…あなたが最近行った講演で、フランス音楽と日本芸術の間の調和を論じたことは、疑問に強い衝撃を与えました。…私たちは、フランスと私たちの国の間の友好的な関係を築き上げるためにあなたが示す情熱に尊敬を表します。」Gil-Marchex“La Musique Moderne Japonaise”France-Japon,1939
- <sup>47</sup> 須永克己「音楽と日本國民性(二)」日本放送協会『調査時報』1933年
- <sup>48</sup> 『財団法人日佛會館第十四回報告』1938年
- <sup>49</sup> Gil-Marchex“La technique du piano”Revue Musicale,número especial dedicado a Maurice Ravel, N°6(1925)
- <sup>50</sup> Gil-Marchex“La Musique de Piano d'Albert Roussel”La Revue Musicale, N°400-401(1970)
- <sup>51</sup> 白石(2011)
- <sup>52</sup> 生島(2009、2012)
- <sup>53</sup> France-Japon No.20 (Mai-Juin1938) p.221
- <sup>54</sup> 大澤は、神戸女学院にて、外山は大阪音楽短期大学(現・現大阪音楽大学)にて教鞭をとった。
- <sup>55</sup> Gil-Marchex“La Musique Moderne Japonaise”France-Japon No.25(1939) p.30
- <sup>56</sup> 『財団法人日佛會館第十四回報告書』1938年
- <sup>57</sup> France-Japon No.25 (Jan,1938) p.215